

NADA DANE
Vol.1 2022

みち



はじめに

旅に出ると、毎日沈んでいるはずの夕陽に心を奪われることがあります。その街ではふつうの風景である街並みを美しいなと思ったり。

旅先で海に沈む夕陽を眺めるように、古い街並みを味わうように、少し暮らしの速度を緩めると、なにげなく見ている日常風景が特別な瞬間に感じられます。それぞれのシーンは見慣れていてとても「ふつう」だけど、歴史や自然、文化など、その場所のもつ「らしさ」とつながると、世界中のどこにもないここだけの風景が立ち上がってきます。当たり前のように見えてくるもうひとつの景色。

「なだだね」は、見過ごしがちな灘のまちの風景を、いろんな視点で眺めながら「ふつうの風景」を味わうフリーペーパーです。

毎回テーマを変えて年一回発行する予定です。小さな冊子ですが「お、なだだね!」と感じてもらえれば幸いです。

みち

道・路・途・径

毎日なにげなく歩いている道も視点を変えれば、「なぜ」や「どうして」に出会えます。何万年もかかってできた地形、空気や水の流れ、暮らしの痕跡、宇宙の動き。道を移動空間としてではなく、風景を感じる場所としてとらえなおす試みです。

山と海

坂は道ができる前からあった。100 万年前に始まった断層活動「六甲変動」は 50 万年前に活発化し、六甲山地は 900m 隆起、大阪湾は 1000m 沈降した。道の上で、道のできるはるか昔にトリップしてみる。



道の先は山

地中のエネルギーが大地を押し上げ、割れ、水がしみ風化が進む。風化した岩は土砂となり斜面を下る。繰り返すエネルギーの均衡が坂の風景を造る。アスファルトは表面の薄い皮膜に過ぎない。坂の下で山に向かって手を合やす人がいる。人智を超えた力を感じているのかもしれない。[MAP ①]

海へつづく道

坂道の上から見える海はいつもおだやかで湖のようにも見える。古語辞典では「ナダはナデ（撫）、ナダラカと同根」つまり、なだらかで穏やかな海を指す。山麓の急な坂道はやがてなだらかになりなだらかな海へ。なだらかな坂道と海は、灘の本質的な風景かもしれない。[MAP ②]



つみかさなる

街の歴史が重なり合った道はタイムマシーン。
人が住むことによって積み重ねられた地層を掘り起こしてみる。



道の上の道

灘区が誕生する前、都市化が進んだ神戸市は人口が急激に増えた。1921年（大正10）に千苜貯水池から西宮市の上ヶ原浄水場を経て神戸市内に水道管を引く。埋め戻した土地を道路として使用することが可能になり水道筋が誕生した。水道筋は（水）道の上にてきた道。[MAP ③]



積まれた記憶

六甲山は花崗岩でできている。山麓の宅地開発で掘り出された御影石が石垣に使われ、阪神間モダニズムと呼ばれる景観を作り出した。また1938年（昭和13）の阪神大水害で流出した巨石が、石垣に使われることもあった。角が取れ明るい石垣は六甲山の記憶のモザイクに見える。[MAP ④]

まがる、ずれる

自然や人の営為によって複雑にからみあう道。
長い年月をかけて街のふつうになった道をほどいてみると
見えてくる風景。



まがる道

西灘村と六甲村では、神戸市の経済発展により市街地確保のため、農地を対象に耕地整理が行なわれた。そのとき基盤目状の道路が形成されたが、ところどころ昔の線形が残っている。近代の道路とは違う、曲がりくねった道を歩くと不思議と心が落ち着くような気がする。[MAP ⑤]



ずれる道

1920年(大正9)に阪急神戸線が大阪・梅田と神戸・上筒井間に開通、さらに1936年(昭和11)に三宮までの高架線が完成。新しく引かれた鉄道と昔からの道がせめぎあい、微妙にずれてぶつかり合う場所には、それぞれの歴史が交錯する味わい深いズレの風景があらわれる。[MAP ⑥]

風と水

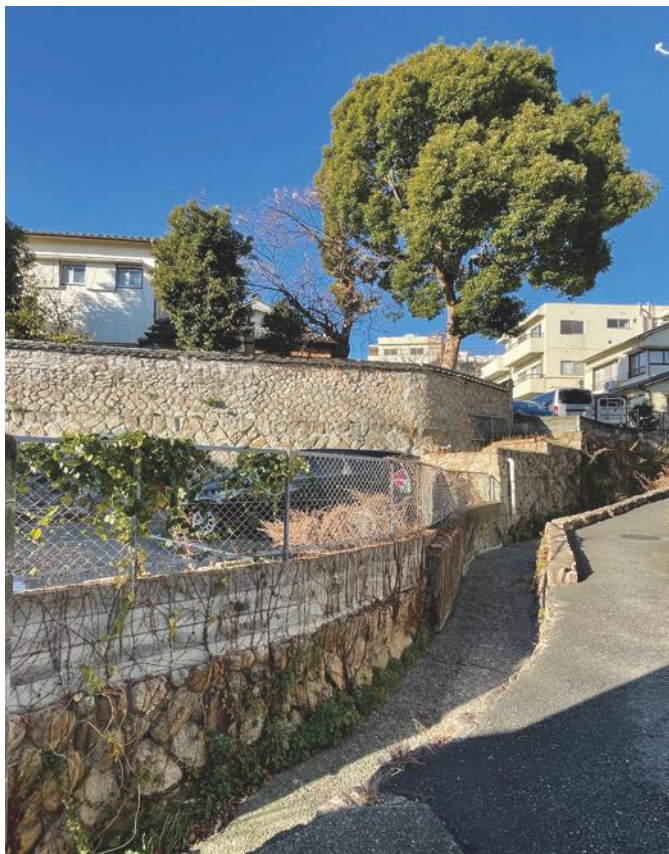
人や車が通るだけではない道のたたずまい。

風や水の動きを注意深く観察すると、道にあふれ出した自然が見えてくる。



風がぬける道

山の斜面が冷やされると、冷たく重い空気が谷筋に沿って流れ下りる。大量の水を流すために掘られた三面張の深い川は、冷風が吹き抜ける風の道になる。夏の夜、都賀川の親水公園では、そのことを知っている人が夕涼みにやってくる。川は水だけではなく風も流れている。[MAP ⑦]



水と歩く道

西郷川、都賀川、石屋川という大きな河川以外の小さなせせらぎは、複雑な高低差のある扇状地地形をくねくねと毛細血管のように流れる。川の流れに寄り添うような小径を歩くと、かつてそこにあったであろう（でも見たことのない）小川の名風景を思い起こさせてくれる。[MAP ⑧]

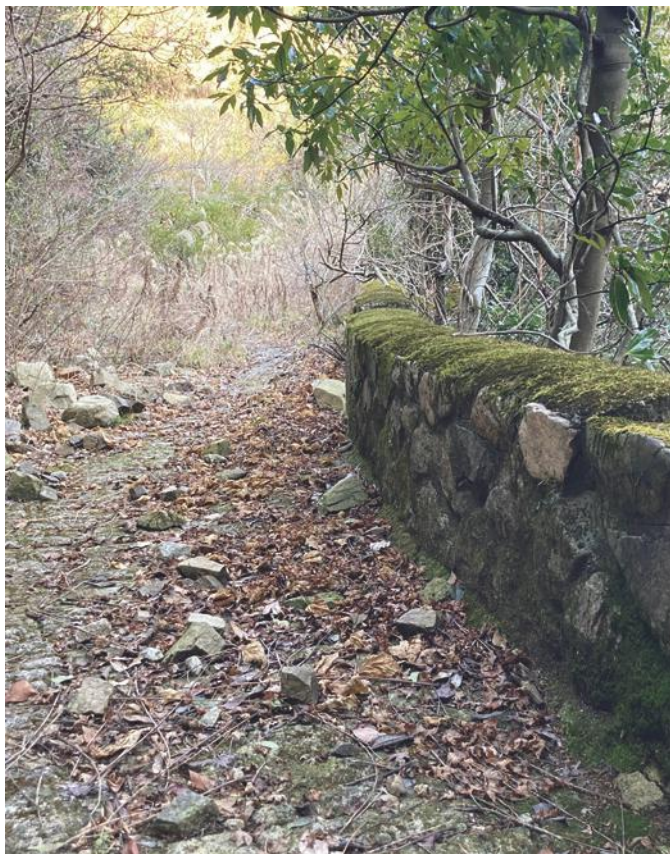
路上の痕跡

歩いていると「なぜ？」に出くわすことがある。それは道に残された痕跡であることが多い。痕跡は歴史をさかのぼり想像力をかき立ててくれる。



分かれの道

真ん中に木が立っている道。車や人は左右に分かれて通る。確かにじゃまかもしれないけど、自然への畏敬の念か、古くからの言い伝えか、切られずにそのまま。さらに人の手によってミラーや反射板がつけ加えられる。道の木が人や車の流れを変え、やがてまちになじんでいくおもしろさ。[MAP ⑨]



消えた道

1929年(昭和4)に開通した六甲山上までのドライブウエーは1938年(昭和13)の阪神大水害で損壊。1956年(昭和31)に新たに表六甲ドライブウエーが完成し、廃道になったかつての道は、わずかな痕跡を残して六甲山麓の谷で自然に還りつつある。

[MAP ⑩]

地形との戦い

大地の動き、自然災害、そこに暮らす人々の営みによって道は形を変える。あたりまえになってしまった風景を踏みしめてみる。



すすんでのぼる

道の先に階段があったら断層の可能性が高い。山麓の断層に沿って、数十万年前に河川的作用でできた平坦地が台地になり段丘崖たんきゅうがけを形成する。やがて宅地開発が進み、高低差を克服するために階段が設置される。山麓の階段は古代と現代をつなぐ道だと思うと、一歩一歩が厳かになる。[MAP ①]

おりてのぼる

明治以降に敷設された鉄道の軌道は、大地の変動とは別の新しくできた人工の地形といえる。道が軌道を横切る場所には踏切や架道橋が設けられる。スロープ、階段、橋。幾多の災害で土砂が堆積した場所では、先人たちの高低差との戦いの痕跡が、形となって露出する。[MAP ⑩]



道に映る風景

道は風景を映し出すスクリーンになる。季節や時刻によって移り変わる光景に、見る人の意識が投影され重なり合う。

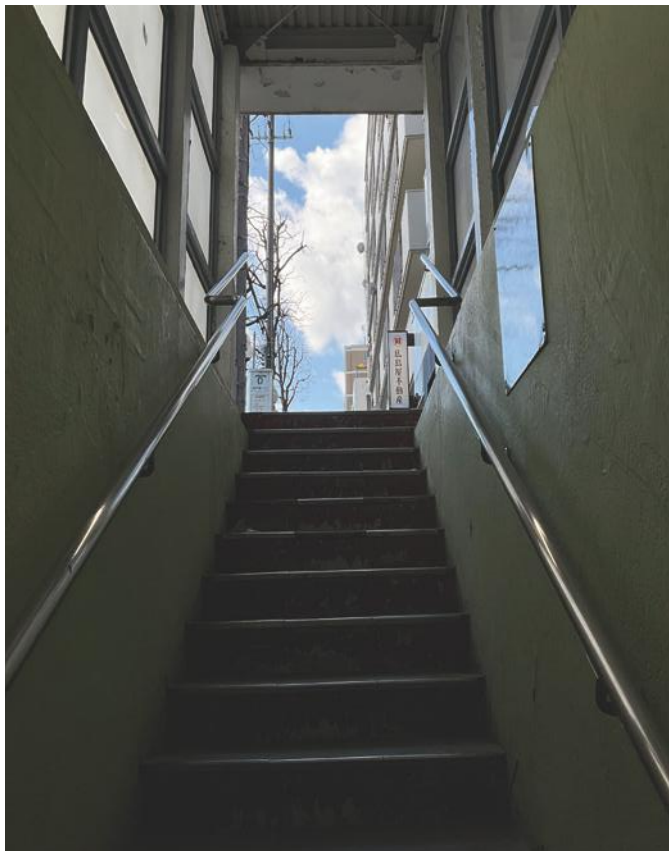


道の上の影

道にできる影にはっとすることがある。街路樹だったり、建物だったり、電線だったり、人だったり、猫だったり。太陽の位置で影が長くなったり短くなったり、濃くなったり薄くなったり。街の要素がモノクロに変換されて情報量が減ると、気づかなかった周囲の気配が見えてくる。[MAP ③]

道の先の空

かつて多くの人に利用された地下道も最近はあまり使われなくなったような気がする。暗くて怖い道ではなくポジティブにとらえ直してみる。地下道に入ると、地上の喧騒が消える。階段の先には空。薄暗い地面の下から見る空は、まるでモニターの画面に映し出された虚像のよう。[MAP ⑭]



道の上

地上 30cm の猫の視点も 50,000m の成層圏も、道の上であることに変わりない。道の上には暮らしの速度を緩める時間がある。



雲天井

青空を天井に見立てることを青天井というが、雲があれば雲天井になる。建物や樹木で区切られた道の上は、空を鑑賞するのうってつけの額縁になる。雲の形や時刻、季節によって道の印象はどんどん変わっていく。同じ道でも飽きることはない。今日は鯖天井。

[MAP ⑮]

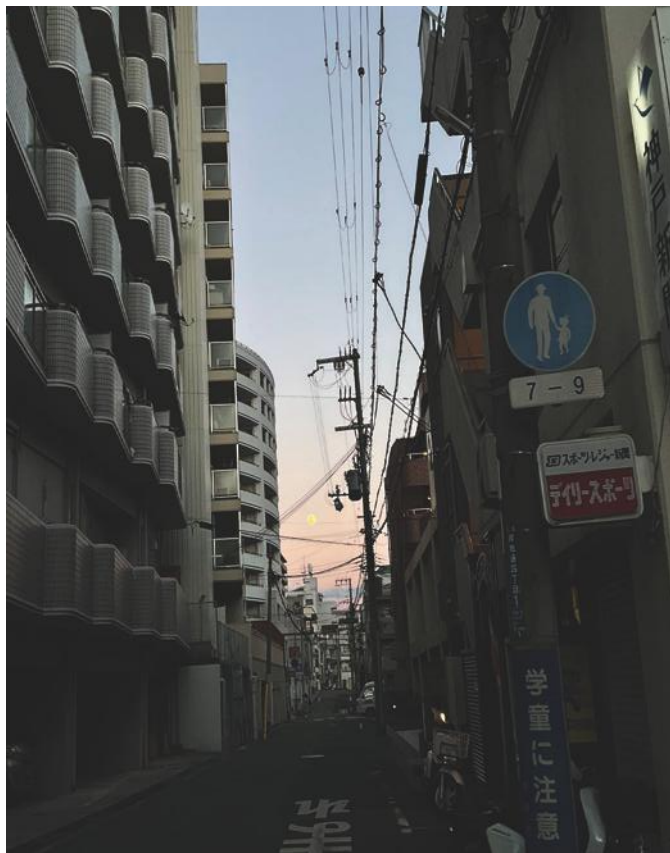
天の道

神話では虹は天と地を結ぶ道とされ、虹の端が地面に接するところを掘ると宝物が出てくるという言い伝えがある。虹は雨つぶの大きさで色が変わる。色鮮やかな虹は大粒の雨、白い虹は霧雨の後に出る。宝物は出てこないかもしれないけれども、天からのプレゼントには違いない。[MAP ⑩]



そら 宙へ続く軸

幹線道路に沿って区画された東西方向の道は真西から約 24 度ずれている。そのずれがもたらすここだけの風景。道は太陽や月を身近にしてくれる座標になる。



夕陽の道

かつて西という方角は特別な意味があった。死者の魂が向かう方角であり、西方浄土があるとされた。年に数日だけ道の真ん中に太陽が沈む時期がある。灘区では春分の2ヶ月前と秋分の2ヶ月後、路上が黄金の光に包まれる。いつも通る道が、どこか遠くの街の知らない道になる。[MAP ⑰]

月の道

灘区の道の先に日の出を拝むことは難しいけれど、月の出だったら出会える。でも満月となると年に4回ほどしかない。晴れの日もさらに少なくなる。もしいつもの道の先に明るい満月が昇ってきたら、とてもラッキー。世界中のどこにもない、この街だけのスペシャルムーン。[MAP ⑱]





灘だいたいマップ

今回の撮影スポットのだいたいの場所です。
あえて細かい場所は示していません。
ぜひ、みなさんで確かめに行ってください。

編集後記

▼「なだだね」の写真は誰でも撮れるふつうの風景らしさを伝えるため、スマートフォンやコンパクトカメラなど、あえて編集委員が日常使っているふつうのカメラで撮っています。特別なインスタ映えとは違う、できるだけふつうの写真撮るように心がけています。

▼灘のなだらかな坂を歩き回ることは地味にしんどいものです。でも、この本のような見方でみちを歩いてみると、足元のひとつひとつに灘だけのユニークさが浮かび上がってくるようでした。

▼毎日なにげなく見ている当たり前の景色の中に、たくさんの“特別”が埋まっています。季節・時間・視点を変えて、特別な瞬間をこれからたくさん見つけていきたいと思えます。

▼「道」という切り口でナダの町を見て歩いて、筋、通りで違う町の姿を楽しみながら、取材していました。

▼知っている道だけで新鮮に映る、はじめての道だけどなんだか懐かしい。そんな場所を切り取った、灘のつめあわせが出来上がっていくようでした。

参考資料

「灘の歴史」（灘区 80 年史編集委員会）

「なだ 灘神戸市編入五十周年記念誌」（灘三ヶ町村神戸市編入五十周年記念行事協賛会）

「神戸の地盤と地誌」（岩見義男著）

「水道筋周辺地域のむかし」（神戸大学文学部地域連携センター編）

「空の名前」（高橋健司著）

なだだね No.1

2022 年 3 月発行

企画・編集 灘百選の会

発行 神戸市

問合せ 灘区役所まちづくり課

灘区桜口町 4-2-1

TEL 078-843-7001

FAX 078-843-7034

神戸市広報印刷物登録
令和 3 年度第 602 号
(広報印刷物規格 A-1 類)

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

